

創刊1975年2月1日 通巻16号 1978年11月1日発行(年4回発行) 発行・発売 三千里社(東京・新宿・歌舞伎町)

季刊三千里

16号 特集 朝鮮を知るために



●朝鮮語を考える●

むくげの会のことなど



飛田 雄一

私は現在、神戸学生青年センターといふところで働いている。センターは、学生を中心とし、合宿、研修会、結婚式などに会場を貸すことにより成り立っているが、他に独自のプログラムとしていくつかのセミナーを主催している。現在は、食品公書セミナー、近代日本とキリスト教セミナー、それに朝鮮史セミナーである。私はセンターで貸会場に関する事務仕事の他に、セミナー企画・運営するという仕事をしている。

ここに今年の四月から正式の職員として働いているが、それ以前三年間ほど学生時代に週二～三回アルバイトしていた。

私は、一九六九年、全共闘運動の最も激しかった年に大学に入った。中学校時代から農学部にあこがれていて、そのあこがれどおり無事入学した。ところがその年は四月から九月まで金子ストライキのため自宅待機を命ぜられた。自宅待機の期間中に自動車の運転免許を取りに自動車学校へ通つたりもしたが、ずっとと自宅に待機などしていられなかつた。

私は高校時代から「進歩的思潮」の持ち主で、佐世保・エンタープライズ事件でも橋から落ちる学生を見て同情していたし、六九年

正月、最後の追い込みの受験勉強の横目にテレビで東大の安田講堂事件の中継を見て、「学生ガンバレ」と思っていた。でも勇気がないのか入学後すぐ全共闘運動に飛び込むということはなかつた。入学後すぐマイクをもつて演説する名も知らない同級生を見ては、ただただ感心していた。

そのうち自宅待機であつたが、徐々にクラス討論会のために大学に行くようになつた。

もともと同窓会の幹事をやつたりする世話をうきの私は、クラス討論会の世話もよくやるようになった。中学校時代、教会学校（日曜学校）に行つていた頃にガリ切りもやっており、慣れていたので重宝がられ、討論会の案内状やビラをよく作つた。

時折開かれる学生大会や大衆団交にもほとんど出席した。大衆団交の場で初めて、まだ一回も授業をうけていない教官達を見た。最初から大学や大学の先生にあまり期待はしないなかつたものの、やはり大学の先生には失望した。

中学時代から農学部、農学部と思って農学部にやつてきたが、大学へ入つて半年もしないうちに「牧場をやるんだ」「養鷄場をやる

んだ」というようなばく然とした思いもなく

なり、どちらかと言ふと自然科学より社会学科の方に興味は移っていた。

この年の七月ごろから当神戸大学の中に

あつた平連こうべの事務所に顔を出すよう

になつた。十月ごろから自宅待機も解かれ、

抵抗があつながらも徐々に授業が始まつた

が、私は自宅待機の期間中、熱心にクラス討

論会に通つたほどは授業に出席しなかつた。

かわりにもつぱらべ平連こうべの事務所に出

入りし、毎週三晩で行なわれるデモや集会に

行つてゐた。母に言わせれば「雄一は農学部

に入らずに平連学部に入った」ということ

である。まさにそのとおりだつた。

平連学部での成績が良すぎたためか、教

養部で一年、専門課程で一年、計二年留年

し、普通四年で卒業するところを六年かけて

卒業した。

農学部に入つたものの農学を勉強する気も

なく、かといつて大学をやめる氣もなかつ

た。二年の頃から朝鮮のことばかりするよう

になつたが、少しでも関係ある勉強ができる

だらうと思ふ農業経済教室に入つた。卒業論

文も農業政策史ということにして「土地調査

事業」をテーマにした。大学院へも行き、二

年のところを三年かかつて修了したが、修士

論文のテーマには困つた。朝鮮のこと以外で

は書けないし、書く気もない。折よく韓国で

日本帝下に活動した天道教系の農業協同組合一

朝鮮農民社の雑誌が復刻されたので、それを

材料に朝鮮農民社のことを書いた。直接の指

導教官の山本修先生が農業協同組合の専門で

あつたのでなんとかカッコがついた。

平連こうべは全国に数ある平連の中でも

朝鮮問題をよく取り上げていた。神戸には

任錫均事件や丁烈相事件（韓国から日本に亡

命した反戦兵士で最終的には朝鮮民主主義人

民共和国へ行った）があつたし、一九七〇年

ごろには兵庫県立神戸商業高校（県商）など

で在日朝鮮人生徒を中心とする激しい糾弾闘

争があつた。平連こうべはこれらの事件を

取り上げたり、影響をうけたりした。また全

国的に入管法に反対する運動がもり上つた時

には、神戸においても平連こうべが中心に

なつて入管法反対の運動を展開した。当時私

も含めた平連こうべのメンバーはそれなり

に一生懸命入管法反対の運動をしたが、これ

でいいのかと思うことがあつた。

入管法は一九六九年以來、度々国会に上程

されるがその都度廃案になり成立には至らな

かった。運動の方もそれに対応し、入管法が

上程されれば運動が盛り上り、廃案になれば

停滞するというサイクルを繰りかえしてい

た。当時は入管法問題即ち在日朝鮮人問題とい

う雰囲気であったが、入管法が上程された時

には在日朝鮮人問題の重大性を考え、訴える

が、入管法が廃案になり全体的な運動が静ま

つてくると、いつしか在日朝鮮人問題の重

大性が自分の中にも薄らいでいくのである。

また三月一日の前後には、平連こうべが

華僑青年闘争委員会（華青闘）と共同で三・

一独立運動記念集会を開いたが、その打合せ

会議の時に華青闘から日本人の責任論を追及

されて当時私は、ただただうなだれるばかり

の思いをした。

このように同じことを毎年くりかえしていく

て良いのか、入管法が上程されると運動し、

三・一集会が近づくと頭を下げるということ

で良いのか、ということが私達の仲間の間で問

題となつた。全体の運動の浮き沈みに左右さ

れない地道な在日朝鮮人問題への取り組みが

必要だったのである。

一九七〇年には平連こうべの有志が差別抑圧研究会を作り、そこで部落問題、在日朝鮮人問題、沖縄問題など広く差別の問題をテーマに学習会を開いていた。ほぼ一年間学習会を続けたが、暮れの反省会で、広く差別の問題を取り扱っても結局どのテーマも追求することはできないということで意見が一致した。そしてどのテーマかということで話し合つたが、朝鮮問題をやろうという意見がほとんどで、来年からは朝鮮問題を学習していくことになった。名前も朝鮮の抗日運動の象徴の花・むくげを借りて「むくげの会」と改めた。

具体的にむくげの会で何を勉強するのかといふ話し合いの時、差別抑圧研究会の朝鮮問題の学習会で何回か講師に招いた森川さんが「朝鮮問題をやるのに朝鮮語を勉強しないのでは話にならない」と発言した。みんな「ごもっとも」ということで森川さんを講師に朝鮮語の勉強会を開くことになった。むくげの会は、一九七一年一月からスタートするが、朝鮮史と朝鮮語を勉強する会ということになった。

むくげの会は当初一五人ぐらいで、二十歳

前後の学生を中心だった。最初のころは調子

よかつたが、その年の三月に卒業して働きだしたメンバーが多く、仕事の都合で参加でき

ないことが多くなり、特に朝鮮語の方は早くも六月ごろに失速状態になってしまった。生徒の数が徐々に少なくなり、ある時期二人になつた。二人になると淋しいもので、一人休めば

先生一人に生徒一人、もし二人休めば先生一人になってしまふ。あたり前のことが深刻なことだった。二人とも休めば一生懸命教えてくれる森川先生にすまないということで、用事が重なった時は調整したり、あるいは交

替で休んだりしたこともあった。

しかし秋ごろになると、「仕事を覚えるために三ヵ月間休む」と書いていた人が六ヵ月目に復帰してきたり、新しいメンバーが加わったりして少しずつ活気をとりもどしてきたり。そして朝鮮語の脱落組も新しく朝鮮語入門講座が開かれる度再びチャレンジし、メンバーに加わってきた。

毎年、年に二回くらい朝鮮語入門講座を開講し、新聞などで宣伝するが、だいたい一〇人ぐらいの受講者があった。ある時は四月には何人か

ピックリしたことある。

一九七四年五月からは、むくげの会の朝鮮語講座を母体として、神戸学生青年センターの朝鮮史セミナーの一環として朝鮮語初級講座が開講し、その後、中級講座（一九七五年四月）、上級講座（一九七五年七月）が開設された。この時点でもくげの会の朝鮮語講座は完全にセンターの朝鮮語講座に合流した。

センターの朝鮮語講座にはむくげの会から一〇人参加しているが、講座にはむくげの会以外の人も加わり、現在、各クラスとも一〇人前後で進められている。ここ一~三年の傾向としては、四月の初級講座には二〇人ぐらいいの申し込みがあるが、そのうち五人ぐらいが中級に進むという具合である。初級一年、中級一年なので最短コースを歩めば二年間勉強すると上級クラスに上ることになるが、最短コースの人はあまりいないようである。中級で留級する人とか、落第してもう一度初級をする人とかいろいろである。

私は一応八年間続けて勉強してきて古参メンバーなのでずっと上級にいるが、八年分の実力はなさそうである。毎年四月には何人かのメンバーが上級に上がってくる。最初の一

カ月くらいは辞書を引くスピード等で差をつけて

てはそのまま何週間も置いておくというのを繰りかえしていたが、昨年、梶村先生らの努力により出版の目途がたち、締切をせまられ

ばかりしていた。大きさにいえば青春のあかしのやうなものであった。

けているが、二ヶ月もすれば変わらなくなってしまうのである。それどころか最近は、他で朝鮮語を学んでいたよくできる人が時々、直接上級に入ってきたりして、ますます影が薄くなっている。枯木も山の脳わいにならないようにと思っているのだが。

朝鮮語講座の方はどうしても翻訳の方が主になってしまふが、三四年前に一部をテキストとして利用していた本を最近、翻訳して

出版した。『朝鮮近代社会経済史』(龍溪書舎)であるが、もとの本は、一九五九年に朝鮮民主主義人民共和国で発行された『十九世紀末期一日帝統治末期の朝鮮社会経済史』である。一章を何ヵ月かかって訳し終えたとき

ばかりしていた。大きさにいえば青春のあかしのやうなものであった。

『朝鮮近代社会経済史』をテキストにむくげの会の歴史研究会をしているが、新たな誤植を見つけたのはガックリきたりしている。

私達の場合、多くの人の厚意があり、幸運にも翻訳出版することができ、ほんとうによかったと思っている。むくげの会を作った頃には考えてもみなかつたことだが、これで一つのくぎりになつたようだ。出版記念会

向つて座り、辞書を片手に原本と原稿用紙を相手に奮闘するとすぐ敗けるのである。敗れ

がわからず、またむくげのメンバーはみな勤勉なので土曜、日曜には二ヵ月くらいの間、集まつては校正ばかりしていた。

最近、本の版元作戦も一段落ついて改めて『朝鮮近代社会経済史』をテキストにむくげの芸会であったが、非常に楽しいものだった。生徒はほとんどが日本人だが、初めてチャーチヨゴリを着ての演技も、幼稚園時代を思い出しての芸劇も、閉幕後のうちとけてのコノバもよかつた。この芸会を毎年恒例のものにしたいと思っている。

むくげの会の当初のころに比べれば、脇や肩をいからせかで、私自身も気負いがない。出発時には日本人は日本人の責任において朝鮮問題を、朝鮮語をしなければならないと、肩をいからせていた。いからせることなく特に理由をつけたが、結婚もせずにはしてんのかと親に言われながらこの八年間朝鮮のこと